

「第二章
読み物資料の活用例」

ぼんたと かんた（低学年1―1）

一 ねらい

自分でよく考え、わがままをしないで、規則正しい生活をしようとする態度を育てる。

二 資料の特質

・社会の一員として生活する上で、人と協調しつつ自律的に生活することが大切である。他から言われるのではなく、主体的に判断し適切に行動できる態度を育てることが重要である。自己中心的な言動で他人に迷惑をかけたたり、快楽を優先し誘惑に負けてトラブルに巻き込まれたりしないよう自制する心を培う必要がある。本資料は、児童が興味半分に衝動的にやってみてしまいそうな身近な事柄を素材として、共感的に考えられるように構成している。

・本資料は、秘密基地を見つけたかんたが、一緒に遊ぼうとぼんたを誘う。ぼんたは、断つたものの遊びたい気持ちもあり迷ってしまうが、立入り禁止の場所であると思慮深く考え、自らを律して思い止まる。かんたも、弱い心の自分を見つめ直し、適切な行動をするという内容である。ぼんたやかんたに共感しながら自らの生活を振り返り、節度ある生活について考えることができる。

三 展開例

1 こころのノートの「気持ちのいい一日」（十四・十五頁）を読んで、弱い心をもつてしまった経験や危険を感じた体験などについて話し合う。

2 資料「ぼんたと かんた」を読んで、話し合う。

(1) かんたが、裏山に入っていていってしまったとき、ぼんたは、どんなことを思ったか。

・入ってはいけないのに、困ったなあ。

・なぜ言うことを聞かないのかな。叱られるよ。
(2) 一人になったぼんたは、どんなことを考えているか。

・一緒に遊びたいな。どんな秘密基地かな。おもしろそうだな。
・危ないことはしてはいけないし、迷うなあ。でも我慢しよう。

(3) かんたは、どんなことを考えて行かないと言ったのか。

・ぼんたの言うとおりだ。あぶないからやめよう。

・もつとよく考えればよかった。わがままをしてはいけないな。

(4) ぶらんこにゆられながら、ぼんたとかんたはどんなことを話しているか。

・わがままをしてはいけないね。我慢して、やめてよかった。

・よく考えないといけないな。安全な場所で遊ぶ方が楽しいね。

3 自分の生活を振り返って、よく考えて行動したこと、逆によく考えないでわがまましてしまったことを話し合う。

4 教師の話を聞く。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例2の(2)では、ぼんたの遊びたい気持ちと自制する気持ちの葛藤を考えさせたい。

・展開例2の(3)では、書く活動を取り入れて、弱い心の自分を見つめているかんたに共感させながら、わがままをしないでよく考えて適切な行動をすることの大切さに気付かせたい。

・展開例2の(4)では、安全で節度ある行動をすることが、自分も相手も気持ちよく生活できることを、児童にぼんたとかんたの役割を与えて即興的に演技させることも考えられる。

・展開例4では、日常生活の様子や日記などで、自律的に生活している姿を紹介したり、こころのノートの「ないしょのはこ」（二十八・二十九頁）を活用するなどして、自らを律し、よく考えて節度ある生活をしようとする実践意欲を高めることも考えられる。

シロクマの クウ（低学年1―(2)）

一 ねらい

自分がやらなければならないことは、しっかりと行おうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ 児童が自立し、よりよく生きていくためには、自分がやらなければならないことはしっかりとやり抜くことが大切である。本資料は、シロクマのクウが自立するために、自分でえさをとることができるまでの様子を描いたものである。クウが自分の力でえさをとるまでの様子は、児童の自立に向けた自己実現の過程を映し出すものである。

・ 自立には、何事にも粘り強く取り組み、努力し続ける忍耐力も求められる。児童がともすると母親に頼りがちになるクウに共感し、親に甘えようとする心と自立しようとする心との間の迷いを考えさせたい。

三 展開例

1 こころのノートの「がんばってるね！」（十八・十九頁）を基に、自分でやらなければならないことを考える。

2 資料「シロクマの クウ」を読んで、話し合う。

(1) ちつともうまくいかないとき、クウはどんな気持ちだったか。

・ 魚がとれなくて残念だ。

・ もう寒くていやだよ。

(2) 「こんどこそ、ひとりですべてみせるよ。」と言ったとき、クウはどんな気持ちだったか。

・ 絶対に一人でとるぞ。

・ 一人でとって、お母さんを喜ばせたい。

(3) すわりこんでしまったとき、クウの心の中はどんなだったか。

・ 寒いし、うでもいたい。あきらめよう。

・ お母さんにやってもらいたい。

・ 何とか自分一人の力でとりたい。

・ ぼくも一人前になりたい。

(4) 一人で魚がとれたとき、クウはどんな気持ちだったか。

・ 自分一人の力でできてうれしい。

・ 頑張って、よかった。

・ お母さんも喜んでくれる。

3 難しかったが自分がやるべきことを、自分一人の力でやり遂げた経験を想起して話し合う。

4 自分の力で挑戦してみたいことを考え、発表する。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 展開例1では、ねらいとする道徳的価値への方向付けをするとともに、児童の生活の中からいくつかの場面や事柄等を具体的に思い起こさせておく。

・ 展開例2の(3)では、クウの迷う気持ちを押さえ、「あきらめよう。だつて…」 「がんばろう。だつて…」 という考えの…の部分で丁寧に取り上げ、多様な考え方を引き出して話し合わせるようにする。

・ 展開例2の(4)では、できたときのうれしい気持ち、自分の成長を実感する気持ち、次も実践したいという気持ちなど、多様な思いがあることに気付かせるために、ペアによる話し合いを行わせることも考えられる。

・ 展開例3では、展開例1で出された考えをもとに自分の経験を考えさせるようにする。場面絵をいくつか提示することも方法である。

・ 展開例4では、こころのノートの「しっかりとやろう」（十八―二十一頁）を活用し、先生・家の人への事前インタビューなどを踏まえることも考えられる。

どんな「ねんせい」になるのかな（低学年1―③）

一 ねらい

よいことと悪いことを区別し、よいと思うことを進んで行おうとする態度を育てる。

二 資料の特質

・ 小学校生活を送り始めた一年生にとって、学級そして学校での生活は希望に満ちたものにしていく必要がある。既に入学前から、幼稚園や保育所などにおいて、入学後の学校生活の中でしてはいけないこと、した方がよいことについては繰り返し具体的な指導を受けている児童が多い。入学前の指導を生かし、入学したばかりの一年生に学校生活での善悪の判断をしつかりさせていくことは重要なことである。

・ 本資料は、小学校生活に胸弾ませて入学した「かばお」が、周囲のいけないことをしている子どもたちを見る中で、「どんなねんせいになりたいかな」という投げかけを通し、児童自身が、なりたい一年生像を描く構成になっている。話合いでは、いけないことをされている子どもたちの声から、「いじわる」、「ごまかし」、「めいわく」の視点を引き出すことで、よいと思うことを進んで行おうとする態度について考えさせたい。

三 展開例

1 小学校で楽しみにしていたことを発表する。

2 資料「どんな「ねんせい」になるのかな」を読んで、話し合う。

(1) はりきっているかばおは、どんな気持ちか。

・ 勉強が楽しみだ。

・ 今日友達とたくさん遊ぶ。

(2) 困っている友達は、どんな気持ちか。

・ いやだな、何もしていないのにたたかかれて悲しい。
・ こまるよ、お話が聞こえないから、勉強できない。
・ ずるいよ、順番を待っていたのに。

・ ひどいよ、ノートが見られなくて、勉強ができない。
(3) かばおは、どんな一年生になりたいかと思っているか。

・ まわりにめいわくかけない一年生
・ みんなで楽しく勉強できる一年生
・ いけないことはやらない一年生

3 いけないと思ったことを注意した経験を想起して話し合う。

4 こころのノートの「してはならないこと」があるよ（三十二・三十三頁）を読む。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 展開例2の(2)では、困っている子の気持ちを掘り下げていくが、いけないことをしている子にどのように注意するか子どもに考えさせることもできる。

・ 展開例2の(3)では、「例えば、どんなことかな。」と問い返し、具体的な姿から、そのよさを感じ取らせることができる。

・ 展開例3では、いけないことを注意できたことに加え、いけないと思っていたけれど何もできなかった体験を、書く活動を基に振り返ることができるようになる。

・ 幼稚園や保育所との連携を日常的に深めていくことで、小学校入学前の具体的な指導内容を生かしたり、授業に年長児時代の担任の先生を招き、お話を伺うことも考えられる。

・ 入学当初から、学校で学んだルールをカード化することで、日常的な指導に役立てる。

たびに でて（低学年2―1）

一 ねらい

気持ちのよいあいさつや言葉遣いなどに心掛けて、明るく接する態度を育てる。

二 資料の特質

・ 礼儀は、相手の人格を尊重し相手に対して敬愛する気持ちを具体的に示すことであり、心と形が一体となつて表れてこそ、その価値が認められる。そこで、はきはきとした気持ちのよいあいさつや言葉遣い、具体的な動作などの具体的な指導を通して、明るく接することのできる児童を育てたい。

・ 本資料は、あいさつを面倒くさいと感じている主人公「さるのケイタ」が、旅に出て、あいさつのない島にたどり着き、その島であいさつの大切さに気づき、明るいあいさつを島に広めていくという内容である。主人公に共感しながら自らの生活を振り返り、礼儀の大切さについて考えさせることができる。

三 展開例

1 様々な言語のあいさつについて紹介し、日常、あいさつをしている場面について発表する。

2 資料「たびに でて」を読んで、話し合う。

(1) 「あいさつじま」から旅に出るケイタはどんな気持ちか。

・ 毎日同じあいさつをするなんて、面倒だ。

・ あいさつなんてしたくない。

(2) 「あいさつのないしま」で、水飲み場をたずねるが、うまく話しかけられないケイタはどんな気持ちだったか。

・ 何だか、話しかけづらいなあ。

・ なぜ、みんなだまって行ってしまうのだろう。

(3) 「あいさつのないしま」の木の上で、ケイタはじつと何を考えているのだろう。

・ なぜ、この島では、さるたちに話かけにくいのだろう。

・ あいさつをしたら、この島のさるたちは、返事を返してくれるだろうか。

・ あいさつを試みよう。

(4) 「あいさつのないしま」で、元気にあいさつをするケイタと「あいさつのないしま」のさるたちはどんな気持ちか。

・ あいさつをすると、気持ちがいいね。

・ みんな明るい気持ちになるよ。

・ 心がほかほか、あたたかくなるね。

・ あいさつって、すてきだな。

3 気持ちのよいあいさつをしたこと、されたことについて話し合う。

4 校長から、児童から気持ちのよいあいさつや言葉遣いを聞いたときの気持ちを話してもらおう。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 展開例2の(4)では、元気にあいさつを交わす主人公「ケイタ」や「あいさつのないしま」のさるの動きやせりふを模倣させ、そのときの気持ちを問うことよってねらいとする道徳的価値の理解を深める。

・ 終末では、このころのノートの「あいさつは 心のリボン」（三十九頁）を活用し、あいさつは人間関係をよりよくするための言葉だということを印象付けることも考えられる。

まりちゃんと あさがお（低学年3―1）

一 ねらい

命のつながりに気付き、生命を大切にしようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ かけがえのない生命を大切にしなければならぬことはだれでも知っているが、何気なく一日一日を過ごし、命の大切さを意識したり生きる喜びを感じたりすることは少ない。特に低学年では、毎日の当たり前前の生活の中に生きている証や生きる喜びがあることを、生活経験を通して感じ取ったり、生命の大切さを自覚したりすることが大切である。そこで、本資料は、生活科で多くの学校が扱う「あさがお」を取り上げ、主人公と自らの体験を重ね合わせながら考えられるように構成している。

・ 本資料は、あさがおの成長を楽しむに大切に育てている主人公が祖母の話の聞いて、命の儚さや命のつながりに気付き、改めて命を見つめるといふ内容である。あさがおが咲いたときの気持ちや萎れてしまったときの主人公の気持ちを考えることを通して、共感的に命の有限性や命の連続性に気付かせていく。

三 展開例

1 あさがおの鉢を見て、育てていたときの気持ちを想起する。

2 資料「まりちゃんと あさがお」を読んで、話し合う。

(1) 初めてあさがおが咲いたとき、まりちゃんはどんな気持ちだったか。

・ きれいに咲いてよかった。

・ 水やりをがんばってよかった。

・ もっといっぱい咲いたらいいな。

(2) 萎れたあさがおを見て、まりちゃんはどんな気持ちだったか。

・ やつときれいに咲いたのに、どうして萎れたのだろう。

・ こんなに早く萎れてしまって、悲しいなあ。

(3) おばあちゃんの「命はつながっていくんだよ。」の言葉を思い出しながら、まりちゃんはどんなことを考えていたか。

・ 花が枯れるのは悲しいけど、種の赤ちゃんができるのだな。

・ 新しい種ができて、あさがおの命はつながっていくのだな。

(4) 自分があさがおと似ていると思うところはあるか。

・ お母さんとまりちゃんはつながっている。続いていくんだね。

・ ぼくも、つながって生まれてきた。大切な命だ。

・ お父さんやお母さんなどが世話をしてくれたから、大きくなれた。

3 生活の中で命がつながっているなど気付いたり、命を大切にしようと思ったりしたことはないか振り返る。

・ 飼っている犬が赤ちゃんを産んで、家族で大事に育てている。

4 こころのノートの「あなたが生まれたときの話」（五十七頁）を踏まえ、自分の考えをまとめる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 導入では、生活科との関連を踏まえ、種を植えたとき、早く咲いてほしいと願いながら育てた体験を発表し合い、あさがおとの関心を高め、資料へつなげる。

・ 展開例2の(4)では、自分もつながってきた大切な存在であると気付いたり、命の大切さを感じたりできるよう、(3)あるいは(4)のどちらかに「書く活動」を取り入れしっかりと考えさせたい。

・ あさがおの栽培体験を通して考えを深めるが、自然愛・動植物愛護の指導のみに限定されないよう留意する。

「ごちそうさまのめいど」（低学年4―1）

一 ねらい

みんなで使うものを大切に、約束やきまりを守ろうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・公徳心は不特定多数の人々に対する思いやりの心である。自分の次に使う人のことを考えて、みんなで使うものを大切にしたり、心配りしたりすることが大切である。自分の都合を優先するあまり、後先を考えずに行動する人々が目につく中、公徳心をもって公共物を扱ったり、約束やきまりを守ろうとする心情を育てたい。

・本資料は、給食のスプーンかごにスプーンを入れるというごくシンプルな話である。スプーンはそろえて入れないと、最後にはふたが閉まらない。次の人が入れることを意識してきちんとそろえて入れる必要がある。急ぐあまり、無造作に投げ込む児童がいると、とたんに乱れてしまう。スプーンかごをキャラクター化し、児童に提示することを通して、共感的に公徳心の大切さを理解させたい。

三 展開例

1 あふれたごみ箱など約束やきまりが守られていないものや場所を見て、気付いたことを発表し合う。

2 資料「ごちそうさまのめいど」を読んで、話し合う。

- (1) スプーンがそろって入れているとき、スプーンかごはどんな気持ちか。
- ・きちんとそろっていて気持ちがいい。
 - ・きれいに並んでいてすっきりする。
- (2) スプーンかごからはみだしたとき、スプーンかごはどんなことを考えたか。

・どうしてきちんと入れないのかな。
・そろっていないと気持ちが悪いな。

(3) みつちゃんやけんちゃんは、どんなことを考えて、スプーンを直したのか。

・当番の友達が運びやすいようにしよう。

・きれいに並べると片付けをする人が気持ちがいいかな。

(4) スプーンをそろえて入れるよきは、どんなことか。

・次に入れる人が入れやすい。

・片付ける人が仕事をしやすい。

3 こころのノートの「みんなで楽しく気持ちよく」（七十二―七十五頁）を基に、自分たちのみんなで使うものや場所の約束やきまりについて振り返る。

4 教師の話聞く。

・公徳心に触れたすがすがしい体験談を話す。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例2の(1)では、はみだしているとふたがしまらないことを押さえながらスプーンかごの心情を考えるようにする。

・展開例2の(4)では、きちんと入れると気持ちがいだけでなく、全員のスプーンを入れるため大切なことに気付くようにする。

・展開例3では、事前に、みんなで使うものや場所にはどのようなものがあるか、そこにはどんな約束やきまりがあるかについて児童の意識の実態を把握し、座席表による指導メモとしてまとめ、意図的指名を行うことも考えられる。

・日常の指導として、資料の場面絵を教室内に掲示し、約束やきまりを守ろうと呼びかけ、意欲付けを行うことも考えられる。

もりの ゆうびんやさん（低学年4―(2)）

一 ねらい

働くことよさを感じて、みんなのために働くこととする心情を育てる。

二 資料の特質

・この内容項目は、今回の小学校学習指導要領改訂で、小学校低学年から系統的に社会参画への精神を培うことが求められ、新たに加えられた内容項目である。

・働くことに対して誇りや喜びをもち、働くことの意義、自己の果たすべき役割について認識し、働く人々に関心を持って進んで社会に役立つこととする気持ちや態度の育成を意図している。

・本資料は、みんなのために働くことの大切さを感じられるように構成している。郵便を配達するくまさんが、森のみんなに心を込めて郵便物を届ける様子を通して、勤労についての考えを深め、勤労を尊ぶ心を培うことができる。

三 展開例

1 自分の係活動や当番活動の仕事内容について発表し合う。

2 資料「もりの ゆうびんやさん」を読んで、話し合う。

(1) 森のみんなは、くまさんのことをどのように思っていたか。

・毎日休まず郵便を配達してくれるからありがたい。

・みんなのことを考えてお仕事をしてくれるからうれしい。

(2) 雪の日、小包を見たくまさんはどんなことを考えたか。

・寒いけど、みんなが待っているから、頑張つて届けよう。

・やぎじいさんの喜ぶ顔を早く見たいなあ。

(3) やぎじいさんに「ありがとう」と言われたくまさんは、どんな気持ちだったか。

・やぎじいさんの喜ぶ顔を見て、ポカポカの気持ちになった。

・山道を登って疲れたけど、幸せな気持ちになった。

(4) お手紙を読んだくまさんは、どんなことを思ったか。

・明日も郵便配達を頑張つて、みんなの喜ぶ顔が見たいなあ。

・これからも一生懸命働いて、みんなに喜んでもらおう。

3 学校や家庭などでみんなのために働いた生活経験を振り返り、こころのノートの「わたしのしごと」（七十九頁）に書く。

4 教師が、くまさんと同様に、働くことよさを感じながら、みんなのために働いている身近な人物について話す。

四 指導上の留意点及び工夫

・資料提示に当たっては、挿絵をもとに紙芝居にして提示したり、音楽の効果を生かしたりすることも考えられる。

・展開例2の(3)では、やぎじいさんの喜ぶ気持ちに触れさせながら、勤労を尊ぶ気持ちを考えさせたい。

・展開例2の(4)では、みんなのために働くよさに目を向けさせ、働くことよさについて考えさせるようにする。

・事前に、子どもたちが家庭や地域で行っている仕事に対する感想などを集め、役に立っていることを実感させることも方法である。

・道徳の時間において、学級の係活動や当番活動など、みんなのために働いた経験についてその意義や役割を考えさせ、みんなのために働くことよさを感得させるようにする。

みんなの ニュース がかり (低学年 4—(2))

一 ねらい

働くことのよさを感じて、みんなのために働こうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ 新たに加えられた4—(2)にかかわる生活場面の中で、係活動を取り上げた。これは、主人公をニュース係とすることで、ねらいに添いながら、情報モラルについても扱えるように構成したためである。

・ 情報モラルの指導については、低学年の発達の段階を考慮して、情報機器の利用等ではなく、日常、おそらくは意識せずに行われているであろう不正確な情報の流布に焦点をあてて構成してある。

・ 本資料は、個人の情報を、よく確かめずにニュースに書いてしまい、友達に責められたニュース係のけいすけが、その後、ゆいさんの言葉をもとに、みんなに喜んでもらえるよう作り直すという話である。みんなの喜ぶ仕事をしようと努力し、最後には喜んでもらえたけいすけの心情に共感させることで、情報モラルについて考えさせながら、みんなのために働くことのよさを考えることができる。

三 展開例

1 みんなのためになる仕事はどんなものがあるか考え発表し合う。

2 資料「みんなの ニュース がかり」を読んで、話し合う。

(1) あわててニュースをはがしているけいすけは、どんな気持ちか。

・ せっかく、みんなを喜ばせようと思ったのに残念。

・ みんなに悪いことをしたなあ。

(2) 教室でニュースをながめているけいすけは、どんな気持ちか。

・ こんなニュースを書かなければよかった。

・ 頑張っていたのに、むだだった。

(3) もう一度、ニュースを書いているゆうすけはどんな気持ちか。

・ ゆいさんが、喜んでくれてよかった。

・ もっとよくたしかめればよかった。

(4) 「みんなのニュースがかり」と言われたけいすけは、どんな気持ちだったか。

・ みんながうれしそうでもよかった。

・ みんなのためにこれからも頑張ろう。

3 自分自身を振り返って話し合う。

・ 今までに、みんなのために働いたことやそのときの気持ちや考えについて話し合う。

4 教師の説話を聞く。

・ 自分の行為が集団に喜んでもらえたときのうれしさなど、勤労のよさを感じられる話をする。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 本資料は情報モラルにかかわる内容が含まれているが、そのための指導に偏らないよう配慮しながら、展開例2の(1)では、誤った情報が与える周囲への影響について、展開例2の(4)では、正しい情報を伝達することの大切さについて触れるようにする。

・ 失敗はしたが、主人公の行為の原点が、「みんなに喜んでもらいたい。」という気持ちなのだというところは、公共の精神にかかわる大切なところである。ここでのノート「大切な それぞれの しごと」(七十六〜七十九頁)などを活用しながら、丁寧に押さえておきたい。

・ 展開例3で経験を想起する際に、具体的な場面がすぐに出ないことがある。展開例1で発表し合った、みんなのための仕事を板書しておく、ここで考える手がかりとなる。

おひめさまと少年（中学年1—（1））

一 ねらい

自分でできることは自分でやり、節度ある規則正しい生活をしようとする態度を育てる。

二 資料の特質

・ 中学年においては、自ら考えて度を過ぎさない節度ある生活ができるよう、生活面における自立を重視した指導を進めていくことが大切である。特に、基本的な生活習慣にかかわる指導を進める場合は、児童自身が内面から望ましい行為を自覚し、節度ある自制心を培うことが必要である。

・ 本資料の主人公であるお姫様は、わがままで自分勝手な行動をしたり、不規則な生活をするなど、基本的な生活習慣が身に付いていない。ある日、お姫様は、規則正しく生活する少年や町の人々の姿を見る。その姿を見たお姫様は、自分の生活を見直し、規則正しい生活を心がけるようになる。お姫様の行為を通して、今までの自分の生活を振り返らせ、自分でできることは自分でやり、節度ある規則正しい生活をしようとする態度を育てていきたい。

三 展開例

1 自分でできることなのに、だれかにやってもらっていることにどんなことがあるか発表する。

2 資料「おひめさまと少年」を読んで、話し合う。

- (1) いつもわがままなお姫様は、どんなことを考えたか。
 - ・ 毎日が楽で、楽しい。
- (2) お姫様は、少年の歌声を聴きながら、どんなことを考えたか。
 - ・ いつまでも少年の歌声を聴いていた。

(3) 少年が生活している町の人々の生活を見たお姫様は、どんなことを考えたか。

- ・ わがままな生活を直さなければいけない。
- ・ 町の人のようにはできないが、少しずつがんばろう。
- (4) みんなから慕われるようになったとき、女王様は、どんな気持ちだったか。

3 今までの自分の生活を振り返り、自分でできることは自分でやり、規則正しく生活をしてよかった経験話し合う。

4 心のノートの「自分をもっとかかやくために」（十五頁）を活用し、気をつけたこと、頑張りたいことについて考える。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・ 資料を提示する場合は、紙芝居のように提示し、資料への興味・関心を高め、児童に資料の内容を理解させやすくする。
- ・ 導入では、自分でできることについて考えさせ、ねらいにかかわる問題意識をもたせるようにする。
- ・ 少年が、すてきな歌声を出せるのは、日ごろから節度ある規則正しい生活をしているからである。展開では、お姫様自身が自分の生活の悪い所に気づき、生活を改めるまでの多様な感じ方や考え方を話し合わせるようにする。
- ・ 終末では、教師の体験談やことわざなどを引用することも効果的である。

少しだけなら（中学年1―1）

一 ねらい

よく考えて行動し、節度ある生活をしようとする態度を育てる。

二 資料の特質

・ 社会における情報化の進展に伴い、わたしたちは容易に情報の収集や発信などができるようになった。しかし、そこには、情報化社会の影の部分も同時に広がっている。誘惑に負け、安易にインターネット等で情報の受け渡しを行うことで、多くの人に迷惑をかけたり、自らが被害にあつたりする危険性が潜んでいるのである。本資料は、情報モラル教材として、これからの情報化社会において、自らの行動を自らコントロールしていこうとする態度を育てることをねらいとしたものである。

・ 家でインターネットを使っていたあつしは、パソコンの画面の中に、興味深い画面を見つけた。一度はあきらめたあつしであるが、「少しだけなら」と、見てはいけないサイトを見た上に、自分の名前や住所を入力しようとした。そのとき、タイマーが鳴り、自らを省みるといふ内容である。誘惑に負けたあつしの心の弱さを、子どもたちも考えることができるであろう。弱い心に打ち勝ち、節度ある生活をするこの大切さについて考えさせたい。

三 展開例

1 インターネットを使った経験について発表する。

2 資料「少しだけなら」を読んで、話し合う。

(1) お母さんと約束をしたあつしは、どんなことを思っていたか。

・ ぜったい、約束を守るよ。ぼくを信じて。

(2) 割引券の画面を見つけたあつしは、どんな気持ちだったか。

・ いいな。何とかして手に入らないかな。

・ みんなも見ているんだから、少しくらい大丈夫だ。

(3) タイマーの音を止め、パソコンの画面をじっと見つめるあつしは、どんなことを考えていたか。

・ 約束をしたのに、やぶつてしまった。

・ 自分は弱い心に負けている。これでは、なさけないな。

(4) お母さんにたずねられ、下を向いてぼつりと答えたあつしは、どんな気持ちだったか。

・ 今度からは、しっかりと自分で考えよう。

3 これまで、「少しだけなら…」と思っただけで、自分でよく考えて思いついた経験や行動して後悔した経験を話し合う。

4 教師の話聞く。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 道徳の時間において情報モラルについて指導する場合、相手への思いやりや公共心などとともに、自らを律し、強い意志をもって行動する態度を育てることが大切である。ここでは、誘惑に負けたあつしの心の弱さに目を向け、お母さんに叱られるからではなく、自分でよく考え、弱い心に打ち勝って行動することの大切さについてしっかりと考え合いたい。

・ 本時は、インターネットを使う際の約束事を確認する授業ではないが、資料に出てくる約束の必要性については、ネットに関連し事件に巻き込まれる危険性があることについても簡単に触れたい。

うれしく思えた日から（中学年1―(5)）

一 ねらい

自分の特徴に気付き、よい所を伸ばそうとする態度を育てる。

二 資料の特質

・「自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす」という高学年の内容の前段階として、中学年では「自分が気付いたよい所を伸ばそうとする」意欲を高め、態度を育てることが大切になる。個性の伸長を図るためには、日常生活の中で、積極的に自分のよさを伸ばそうと努める児童を育てていきたい。よい所を伸ばそうと努力していけば、その効果は他にも波及していくという点にも着目させ、授業を展開していきたい。

・児童にとつては、等身大の主人公を登場させた。「自分もそう思う。」「自分もそうなれたらいいな。」という思いがつぶやかれる身近な存在として共感的に扱いたい資料である。

三 展開例

1 心のノートの「自分のよいところはどこだろう?」（二十八・二十九頁）を活用して、自分の特徴について振り返る。

2 資料「うれしく思えた日から」を読んで、話し合う。

(1) 以前の「ぼく」は自分のことをどう思っていたか。

・ いいところなんてひとつもない。

・ 目立たない自分がいやになる。

(2) ボールが三十メートルを超えてみんなが声をかけてくれたとき、どんな気持ちだったろうか。

・ みんなが認めてくれて、とてもうれしかった。

・ 自分にもこんないいところがあったんだ。

(3) 野球の練習を続けた一年間に友達や家族の言葉を思い出したのはどんなときか。また、そのときどんなことを思ったか。

・ 練習がつらいとき。思うように体が動かないとき。

・ 自分には誰にも負けないいい肩がある。このままじゃない。もっともっとよくなりたい。

(4) いいところがたくさん伸びてきた「ぼく」は、今どんな気持ちでいるだろうか。

・ いいところを伸ばそうと努力していたら、いつのまにか苦手なこともできるようになっていてうれしい。

・ もっともっと自分のよいところを伸ばしたい。

3 自分自身を振り返って話し合う。

・ 自分の長所をもっと伸ばそうと努力してきたか。

・ 自分の短所をどのように克服しているか。

4 心のノートの「自分のダイヤモンドをみがこう」（三十一頁）を活用し、自分のよさを生かすことについてまとめる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 自分の特徴に気付くとは、長所だけでなく短所も含めて見いだすことである。中学年では、短所や不得手なものを努力によって望ましい方向へ改めることも大切だが、まずは自分のよい所に気付き、自分の個性を伸ばしていこうする態度を育ててきたい。

・ 展開2の(3)の発問では、心の支えとなつている友達や姉の言葉を思い出すときと、そのときの主人公の心情を二段階に分けて聞いていくようにする。

卓球は四人まで（中学年2―(3)）

一 ねらい

友達のことを互によく理解し、友達を大切にしようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ 中学年になると人間関係が広がり、友達とのかかわりを重視するようになる。しかし、仲のいい友達だけでグループをつくって遊ぶことが多く見られることから、固定化しやすい仲間集団をより広い友達関係へと向ける必要がある。

・ 本資料は、気の合う者同士で仲良しになる傾向がある中学年の児童が、クラスの仲間を傷つけてしまったことを反省し、新たな友達関係を築こうとする内容である。児童にとって身近な遊びを取り上げるとともに、日常に起こり得る内容であり、児童が共感しながら自らの生活を振り返り、友達と互いに理解し合い、友達を大切にしようとする事について考えられるようにしたい。

三 展開例

1 心のノートの「ひとりじゃないからがんばれる」（四十四・四十五頁）を活用し、友達がいてよかったと思うのはどんなときかについて、発表する。

2 資料「卓球は四人まで」を読んで、話し合う。

(1) 仲のいい友達三人を遊びに誘ったときのしゅんは、どんな気持ちだったか。

・ 今日楽しいぞ。早くみんなと試合がしたい。
・ みんなもきつと満足してくれる。

(2) しゅんが、一緒に遊びたいと声をかけてきたとおるの願いを断ったの

はどんな気持ちからだったか。

・ 五人になって卓球の時間が少なくなると楽しくない。

・ 仲間はずれにしたわけではない。

(3) 卓球をしていたとき、しゅんは何を考えていたか。

・ なんだか楽しくないな。

・ とおるに悪いことを言ったのではないか。

(4) どんな考えからしゅんたちは、次の日の朝、とおるを校門で待っていたか。

・ あやまって、五人で遊べる機会をつくりたい。

・ たくさん友達がいた方が、楽しくなるはずだ。

3 友達のことをよく考えて行動した経験を振り返り、誰とでも仲良くしていくために大切なことを発表し合う。

4 心のノートの「信じ合い、助け合う友だち」（四十六頁）を活用し、友達とのかかわりについて考える。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 展開例2の(2)では、児童を主人公に共感させ、「仲のいい友達のため」「時間がないのだから仕方がない」などの気持ちについて考えられるようにする。

・ 展開例2の(3)では、同じクラスの友達に寂しい思いをさせてしまったことが、仲のいい友達と遊んでいても楽しくなかったことにつながったことに気付くようにする。

・ 展開例2の(4)では、児童をしゅんたちに共感させ、同じクラスの友達に対する配慮やよりよい友達関係を構築することについて自分とのかかわりで考えられるようにする。

ぼくの妹に（中学年3―1）

一 ねらい

生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にしようとする態度を育てる。

二 資料の特質

・ 待望の妹が生まれ、兄として何でもしてあげようと張り切っていた主人公だったが、妹が自分になつかなかつたり、母親の愛情を妹に独占されたと思うようになったりしてなげやりになつてしまう。ある日、妹に布団をかけることを頼まれた主人公がうっかり忘れてしまう。すっかり冷えてしまったのか、妹は夕方になつても泣きやまない。とうとう妹を病院に搬送することになる。病院の先生の言葉に、主人公は命の尊さについて考えるようになる。

・ 主人公に共感させ、その思いを想像させながら、生命の尊さを感じさせ、生命のあるものを大切にしようとする態度を養うことができる資料である。

三 展開例

1 自分が「生きている」ことを実感するときには、どんなときか発表し合う。

2 資料「ぼくの妹に」を読んで、話し合う。

(1) 妹が生まれたときのぼくの気持ちはどんなだっただろう。

・ やつと兄妹ができてとてもうれしい。

・ 兄として妹のために何でもしてあげたい。

(2) 母の言葉で妹に布団をかけ忘れたことに気付いたぼくは、どんな気持ちだったか。

・ 妹のために何でもしようと言いながら、なげやりな気持ちがあったのかもかもしれない。

・ 妹のことを本気で考えたらこんなことにはならなかった。

(3) 病院の先生の話を聞いて、ぼくはどんなことを考えただろうか。

・ 命はたった一つのものだから、大切にしなければならぬ。

・ 病気の妹を見守るということは、とても責任があることだ。

・ 兄として妹のことをもつと本気で見守っていこう。

3 これまでの自分の生活を振り返って、生命を大切に感じた経験を話し合う。

・ けがをしたとき、健康のありがたさや、命の尊さを感じた。

・ 兄弟が生まれたとき、生命の神秘さを感じた。

4 心のノートの「たったひとつのわたしのいのち だからかがやいている」(六十八・六十九頁)を読んで、生命の大切さについてまとめる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 生まれてくるときはだれでも、親の愛情や希望に包まれているものである。展開例2では、主人公が生まれてきた妹に抱いた愛情や希望を想像させながら、家族の愛情が妹の生きる原動力になっていることに気付かせ、生命を尊重し、精一杯生きていくことの大切さについて考えさせたい。

・ 展開例3では、心のノートの「生きているってどんなこと」(五十六・五十七頁)を活用して、「生きているってすばらしいな」と感じたことを記入させることも考えられる。

ひどいよね（中学年4―1）

一 ねらい

約束や社会のきまりを守り、社会生活の中で守るべき公德を大切に育てる態度を育てる。

二 資料の特質

・この時期の児童は、気の合う仲間の間できまりをつくり、自分たちで決めたことを大切にしている傾向がある。また、成長の過程において大人の矛盾した行為に対する批判の目も育ってくる。これらの児童の純粋な面を伸ばしながらも、自分本位になりやすい点を振り返ることができ資料である。

・本資料は、イラストと吹き出しで構成されている。気の合う友達同士で町たんけんをする主人公である。日常的にどこにでもありがちなマナー違反に出会い、その行為に「ひどいよね」と批判的な目を向けるところが、公園で遊ぶ場面になり、滑り台の順番待ちをしている友達の前に、割り込ませてもらう。「友達だからいいよね」という考えに基づく行為である。まさに、自分たちの都合によるものである。そして、それまでは「ひどいよね」と他者を批判していた主人公の立場が逆転し、「ひどいよね」と言われることになり、「はっ」と、自分の行為を振り返るのである。

三 展開例

1 身の回りの約束やきまりの違反について考える。

2 資料「ひどいよね」を読んで、話し合う。

(1) 「ひどいよね」と言う主人公はどんな気持ちだったか。

・まったく、人の気持ちを考えない悪い人だ。

・どうして大人はこんなことをするのか。

(2) 滑り台で「先にやらせて」と言ったときの主人公はどんな気持ちだったか。

・友達のところに入れてもらうのだからいいだろう。

・一人ぐらい入れてもらってもかまわないだろう。

(3) 「ひどいよね」と言われたときの主人公はどんな気持ちだったか。

・自分だけはいいかと勝手に思っていた。

・いたずら書きや歩道に自転車を置く人たちと自分も同じことをしてしまつた。

3 社会生活の中で、周りの人のことを考えて約束やきまりを守っている経験を話し合う。

4 心のノート「やくそくやきまりを守るから仲よく生活できる」(七十二〜七十五頁)を活用し、児童が学校生活や社会科見学等で約束やきまり守った経験を紹介する。

四 指導上の留意点及び工夫

・どこにでもありがちなルール違反の場面(神社仏閣等でのいたずら書き、コンビニエンスストアの前の歩行を妨げる駐輪、公園のベンチ付近のごみのポイ捨て)である。授業では、これらに吹き出しを付け、児童が自分とのかかわりでじっくりと考えさせるために書く活動を取り入れることも効果的である。

・中学年の特徴でもある正義感を認めることも大切であるので、身近にあるルール違反についても十分話し合いたい。同時に、自分たちだけの勝手なルールによって周りに迷惑をかけていないかという自分自身の振り返りによって、ねらいとする道徳的価値にかかわる思いや課題を培うようにする。

レストランで（中学年４―（１））

一 ねらい

約束や社会のきまりを守り、公德心を大切に育てる態度を育てる。

二 資料の特質

・高度情報化社会の到来とともに、児童を取り巻く社会環境も激変し、特にコンピュータ、携帯電話等に代表される電子メディアの発達普及が児童の心の成長に与えるマイナス面に關して、様々な方面から指摘されている。したがって、将来に渡って、児童一人一人に、確かな情報リテラシーをはぐくむとともに情報モラルについても適切な指導をしていくことが喫緊の課題である。

・本資料は、誕生日に家族とともにレストランを訪れたわたしが、傍若無人に携帯電話で友達と話している高校生に遭遇し、携帯電話を使用する上でマナーやきまりを守ることの大切さに気付き、今後、自分が身がどのように対処していけばよいのかについて考えられるように構成されている。資料の内容が児童にとって身近であり、かつ具体的であるので、中学年の児童にとって共感しやすく、道徳的価値の自覚を深めやすいと考える。

三 展開例

1 きまりを守らないことで、自分自身が嫌な思いをしたり、みんなに迷惑をかけたことがないか発表し合う。

2 資料「レストランで」を読んで、話し合う。

- (1) 店の人の困った顔を見て、わたしはどう思ったか。
 - ・いい加減に携帯電話で話すのはやめてよ。
- (2) 大声でさげびそうになったときのわたしはどんな気持ちだったか。
 - ・まわりにいる人たちのことをもっと考えてよ。

(3) もう一度、大きな声でさげびなくなったときのわたしはどんな気持ちだったか。

・あなたたちのためにどんなにまわりの人たちが迷惑をしたか本当に分かっているの。

3 これまでの生活経験と重ね合わせながら、学校や社会の規則やマナーを守らないことが他人に迷惑をかけることにつながるについて話し合う。

4 心のノートの「気持ちよくすごせるきまりやマナーを見つけよう」（七十四・七十五頁）を基に話し合う。

四 指導上の留意点及び工夫

・資料中に出てくる「けいたい電話」という言葉や資料の内容全般について児童が理解することが難しい場合は、実態に応じて、適宜説明を加えながら指導する。

・情報モラルにかかわる指導計画などに位置付けることも考えられる。

妙見山のちかい―岩崎弥太郎―（中学年4―(3)）

一 ねらい

・ 父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくらうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ 家族は、互いに思いやり支え合うなかで、家族の一員としての自覚を深め、家族の大切さを実感していく。本資料は、先人「岩崎弥太郎」が、父母の愛情を感じ、その思いを支えに夢をかなえるまでの生き方を描いた資料であり、自分を支えてくれている家族の大切さについて考えられるように構成している。

・ 弥太郎は、苦境にもめげず勉学に励み、海運事業に打ち込んで成功を収め、日本の近代化にも貢献した。その生き方を支えたものは、人としての生き方を教え続けてきた母（岩崎美和）の存在にあった。母は、弥太郎の夢を愛情をもって支えるときともに、家族を大切にすることを教えてきた。本資料は、弥太郎と家族とのエピソードから、自らの生き方を支えてくれる家族の大切さに気付き、家族の一員であることの自覚を深めて、協力し合って楽しい家庭をつくらうとする心情を育てるものである。

三 展開例

1 社会科との関連を踏まえ、岩崎弥太郎について知る。

・ 坂本龍馬と同じ時代に土佐で生まれ、海運事業で活躍した人物である。

2 資料「妙見山のちかい―岩崎弥太郎―」を読んで、話し合う。

- (1) 妙見山の頂上で、海をじつとにらみつける弥太郎は、どんなことを思っていたか。

・ 母には、自分の気持ちはどうせ分かってもらえない。

・ ことなくらしじやなければ、夢もかなったのに。

- (2) つつみを差し出して言った母の言葉を聞いて、弥太郎は、どんな気持ちで涙を流していたのか。

・ 自分のために山を売ってお金をつくってくれるなんて、母は、自分のねがいを分かってくれていたんだ。

・ 自分を大切に思ってくれていたのに、そのことに気付かなかつた自分はずかしい。

- (3) 江戸に立つ前の日、妙見山の頂上でちかいを立てる弥太郎は、どんなことを思っていたか。

・ 父と母は、自分の夢や生き方を支えてくれる大切な存在だ。

・ 自分を大切に思ってくれている父と母の思いにこたえるためにも、必ず夢をかなえてみせる。

- 3 家族が自分のためにしてくれたことを振り返って話し合う。

4 心のノートの「わたしの成長を温かく見守り続けてくれる人：家族」（八十〜八十三頁）を活用して、家族の願い、家族への思いなどについてまとめる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 本資料は、先人の伝記を題材としている。時代背景や地理、方言については、説明を加えるなどの補足をしたい。

・ 展開例4では、家族の一員であることの自覚を深めて、協力し合って楽しい家庭をつくらうとする意欲を高める。家族からの手紙を読むことなども考えられる。

みんな、待っているよ（中学年4―（4））

一 ねらい

先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学校生活を送ろうとする態度を育てる。

二 資料の特質

・児童にとつて、学級や学校は、毎日の生活を過ごす場である。なかでも、日常生活の大半を過ごしている学級は、一人一人の児童の心の支えとなるものである。先生への敬愛の念をもち、友達同士が互いに支え合つて、楽しい学校生活を送ろうとする態度を育てることは大切なことである。

・本資料は、院内学級に通うことになった主人公のえみが、院内学級やそれまで通っていた三年三組の先生や友達とのかかわりを通して、自分が先生や友達に支えられていることを知り、学級の一員としての自覚を高めるという内容である。普段、当たり前前に過ごしている学級での先生や友達との心のふれ合いの温かさを確かめ合い、学級は心の支えとなる場や集団であることに気付かせたい。

三 展開例

1 心のノートの「わたしの学級」（八十七頁）を基に、自分たちの学級のよいところについて考える。

2 資料「みんな、待っているよ」を読んで、話し合う。

(1) 院内学級に通うことになったえみは、どんな気持ちだったか。

・知らない人ばかりで不安だな。友達ができるだろうか。

・三年三組の先生や友達とはなれて、さみしいな。

(2) 院内学級の様子を見たり、四年生のあさみさんに「みんな、友だちだよ。」と言われたりして、えみは、どんな気持ちだったか。

・みんなと友達になれそうかな。

(3) 手術の前に、えみはどんな気持ちだったか。

・手術が心配だな。みんなと勉強したり遊んだりしたいな。

(4) 「みんな、待っているよ」という絵や手紙をもらった「えみ」は、どんなことを思ったか。

・みんなが応援してくれている。手術を頑張ろう。

・わたしも、学級の一人なんだ。早くよくなって、みんなといっしょに勉強したり遊んだりしたいな。

3 学級の先生や友達の応援を受けて頑張った経験を話し合う。

4 自分たちの学級の歌をみんなで歌い、学級の一人としての自覚を高め、余韻をもつて終わる。

四 指導上の留意点及び工夫

・入院し、初めての院内学級に通い、大きな手術も控えたえみに共感させ、院内学級や三年三組の先生や友達が、えみの心を支え、励ましてくれたことに気付かせたい。そして、心のノートの「わたしの学級」（八十七頁）などを活用した小集団による話し合いを通して、児童自身も、自分の学級の一人であることやその喜びを確かめ合うことで、道徳的価値の自覚を深めたい。

・授業の終末では、学級の集合写真やみんなで取り組んだ活動の写真を提示し、余韻をもつて終わることも効果的である。

・院内学級は、病気やけがで長期にわたって入院している子どもたちが、学校と同じように勉強できるように設けられた学級である。授業の中では、そのしくみや様子についても補足したい。

ホームステイ（高学年1―1）

一 ねらい

生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛けようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ 基本的な生活習慣は、わたしたちの日々の生活を維持していく上で大切なものであることについて理解を深め、そのことをもとに、児童一人一人が自分の生活を振り返り、改善すべき点などについて見直しながら、自ら節度を守り節制に心掛けられるように継続的に指導することが求められる。

・ 本資料は、児童がホームステイによる短期交換留学を体験するという内容で、舞台は外国という設定である。主人公のまさみは、自宅で夜更かしをしたり、流行している服を身につけたりすることを当たり前と考えている。そのため、ホームステイ先でも同様のことを期待する。そして、まさみがホームステイ先の家庭の習慣とその子どもとの交流を通して、普段当たり前と考えていた自分自身の生活を見つめ直すという内容である。

・ 資料前半では、就寝時間（生活習慣）を扱い、後半で流行の服（節度・節制）を取り上げる二部構成となっている。そこで、自分の思いや願いを培う学習活動では、双方の意見が出るように発問することにより、深めていきたい。

三 展開例

1 ホームステイとは、どのようなことなのか、また、ホームステイ先でどのような活動があるのかを紹介する。

2 資料「ホームステイ」を読んで、話し合う。

(1) 「もう少しやろうよ。」とイザベラにささやくまさみは、どのような気持ちか。

・ 少しぐらい起きていたって大丈夫でしょう。

(2) 「その人が気にいっているものを着ればいい。」とイザベラに言われた

まさみは、どんな気持ちだったか。

・ そんなこと、考えたこともなかった。

(3) 母との会話を思い出したまさみは、どのようなことを考えたか。

・ お母さんは、「流行に左右されないこと。」と言っただけ、それと似ている。

3 自分の生活や習慣を振り返って、きまりよい生活ができていたことやできていなかったことを振り返って話し合う。

4 心のノートの「自分の一日は自分でつくる」（十二〜十五頁）を活用し、生活習慣に関し、改めたいこと、続けたいことについてまとめる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 資料の内容を理解するためには、ホームステイそのものを知ることが重要である。写真や映像を用意して児童の興味・関心を喚起する。

・ 「その人が気にいっているものを着ればいい。」とのイザベラの言葉は、まさみの考え方を根本から揺さぶるものである。流行を追うことが当たり前なのまさみの気持ちとイザベラに言われて気付いたことを対比する工夫が必要である。

・ 基本的な生活習慣を実践し、節度を守り節制に心掛けることは、心と体の健康づくりに直結している。学校生活全体を通じた日常の指導を徹底し、実践化を図ることが求められる。

夏の日(1) (高学年2—(2))

一 ねらい

だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にしよ
うとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ 思いやりの心とそれが伴った親切な行為を、児童が出会うすべての人
に広げていくことをねらった資料である。ごみ収集をしている主人公
に共感し、どうしようもできない事態や怒りに直面して、親切に助け
られたときの気持ちについて考えさせたい。

・ 日ごろ親しくない人から親切にされたときの気持ちを自分とのかかわ
りで考えることで、親切の意味を改めて考え、思いを広げ深めること
ができる。そのことは児童が自分自身を見つめることにつながり、親
切にすることへの思いや課題を培うことにつながるっていく。

三 展開例

1 ごみ収集の仕事は大変だと思ったことについて話し合う。

2 資料「夏の日のこと」を読んで、話し合う。

(1) 袋をたたきつけ、怒りに震えながら立ちすくんでいたときのわたしの
気持ちはどんなだったか。

・ どうして、こんなごみの出し方をするんだ。ひどい。

・ こんなに汚れてこの後、仕事にならない、どうしよう。

・ こんなつらい仕事やめてしまいたい。

(2) がんばるおやじさんからタオルを掛けてもらったとき、わたしの気持
ちはどんなだったか。

・ 態度が悪くてしかられると思ったのに、こんなに親切にしてもらって
うれしい。

・ こんなに汚れた自分を家に上げて、シャワーまで浴びさせてくれて感
激だ。

・ おやじさんが出したごみでもないのに謝ってくれるんだ。

(3) わたしがいつまでも忘れることができない思いとは、どのようなもの
なのだろうか。

・ 親しくもない人から親身になって親切にもらった感動。

・ あんなにつらかった自分の思いが、優しいおやじさんやお母さんのお
かげで癒され変わったっていったうれしさ不思議さ。

・ 世の中には、ひどいごみの出し方をする人もいるけれど、優しく親切
な人もいるんだという心温まる思い。

3 相手の立場に立ち、特に親しくない人に対して親切にした経験を振り
返り話し合う。

4 心のノートの「あなたの心にあるそのあたたかさ」(四十四〜四十七頁)
を活用し、感じたこと・考えたことを発表する。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 展開例1では、児童がごみ収集作業の大変さを思い起こすことで主人
公に共感し、自分とのかかわりで考えられるようにするために、資料
の内容への導入を行う。

・ 展開例2の(3)では、「親切について、考えが深まったこと」を問うて
いる。「親切にされてうれしかった」などの反応に終始して深まりが
感じられない場合には、「わたしは、この夏の日のこと、親切につ
いてより深く考えるようになったが、それはどのようなことからだろ
うか。」と補助発問を投げ掛けることも方法である。

・ 展開例4では、これまでの体験活動や学校行事を振り返り、想起させ
ることも方法である。

知らない間の出来事（高学年2―(3)）

一 ねらい

互いに信頼し合い、友情を深めていこうとする心情を育てる。

二 資料の特質

- ・本資料は、情報モラルにかかわる資料である。
- ・社会の情報化が進展し、コンピュータや携帯電話等が普及することにより、情報の収集や表現、発信などが容易にできるようになったが、その一方で、情報化の影の部分が深刻な社会問題になっている。本資料は、携帯電話の普及を背景とし、メールの濫用を通して相手を傷つけてしまうという、人間関係に負の影響を及ぼした内容を題材としている。

・転入してきたあゆみは、メールアドレスを教えてほしいと言われるが、携帯電話を所有していなかった。みかは、そのことを何気なく友人へメールに書いて流す。しかし、その内容が翌日が変わってしまっていることに驚く。このことを双方の立場に立つて構成した資料である。

三 展開例

1 心のノートの「友だちっていいよね」（四十八〜五十一頁）などを活用し、最近仲良くなった友達のことを想起する。

2 資料「知らない間の出来事」を読んで、話し合う。

(1) わき目もふらず家に帰っているとき、あゆみはどんなことを思っていたか。

・これからこのクラスで仲良くしていけるだろうか、不安。

・自分は何も悪いことをしていないのに、悲しく、くやしい。

(2) 携帯電話を持っていないことを知ったとき、みかはどんなことを考えるか。

たか。

・持っている人がいるとは思わなかったので、びっくりだ。

・せっかく友達になれそうなのに、困ったな。

(3) 電話番号の書いてあった紙をもとにもどし、電話をしようとしたのは、どんな気持ちからか。

・自分の想像でメールを流してしまい、申し訳ないことをした。

・あゆみさんにとっても悲しい思いをさせてしまい、すまない。

3 今まで、友達と仲直りをして、友達のありがたさを感じたことはないか振り返る。

・意見が分かれて、けんかをした後、仲直りをした。

・お互いに自分のよくなかったことを言い合っているとき、友達はいいなと思った。

4 友人に対する誤解が解けて、さらに友情が深まった話など、これまでの教師の体験談を聞く。

四 指導上の留意点及び工夫

・道徳の時間の特徴を踏まえ、危機回避の方法やその際の行動の具体的な練習を行うことにその主眼をおくのではないことに留意する。

・学級内に実際に転入生がいる場合は事前にその状況について把握しておき、指導の際に留意する。

・本資料は、二人の回想によって構成されている。全体を把握した上で、それぞれの立場に立つて、話し合う場面を用意するなど考えられる。

・展開例2の(3)を授業のねらいに強くかわる中心的な発問とし、書く活動や少人数での話し合いなどを取り入れたりしながら、児童の思考を深めていくようにしたい。

幸せコアラ（高学年2―(3)）

一 ねらい

友達と互いに信頼し合い、友情を深め、仲よくしようとする心情を深める。

二 資料の特質

・児童は日常的にメディアに接触する機会が増え、その影響は深刻なものとなっている。とりわけ情報モラルにかかわる携帯電話でのメール交換による交友関係の在り方について、どのように対処すべきかを考えさせる必要がある。本資料は、携帯電話を使用したチェーンメールが友達の心を傷つける原因となることを認識させるように構成している。

・本資料は、自分に送られたチェーンメールに戸惑う主人公が、身内の交通事故をきっかけにそれを親友に送ってしまったことから、相手を悲しませたことに思い悩むという内容である。メールの怖さの一端を理解させながら、友達関係について考えさせることができる。

三 展開例

1 携帯電話の普及率について知る。（教師が客観的なデータを示す）

2 資料「幸せコアラ」を読んで、話し合う。

(1) 瑞葉から送られてきた「幸せコアラ」のメールを見た夏希は、どんなことを思っただろう。

・このメールをどうすればいいのだろう。

(2) 祖母の事故のことを聞いた後、何度も携帯電話に残されていた「幸せコアラ」の文字を読み返す夏希は、どんなことを考えていただろう。

・自分のせいで祖母がけがをしたのかもしれない。

(3) 恵里からのメモを読んだ夏希は、どのようなことを思っただろう。

・取り返しがつかないほど恵里のことを傷つけてしまったんだ。
(4) 恵里のメモを手にして父母のところに向かう夏希は、どんなことを考えていただろう。

・恵里に対して自分のしたことをきちんと言おう。

3 大切な友達の心を言葉や態度で傷つけてしまったことはないか話し合う。

4 心のノートの「友だちっていいよね」（四十八〜五十一頁）を活用し、友達から学んだことなどについて考える。

四 指導上の留意点及び工夫

・導入では、臨場感をもたすために、教師が携帯電話を手にながら話すなど工夫する。その際に扱うデータは可能な限り最新のものにする。
・家庭では子どもに携帯電話を与えない方針の場合もあるので、携帯電話を持つことが当たり前であるような扱いは避ける。

・話合いの場面では、主人公への共感と臨場感を高めるために、携帯電話を持たせながら心情を語らせたい。

・自分を振り返る段階では、実際に経験したことが表出される。そこでは友達の名前などは伏せるように指示しておく。

・携帯電話に限らず、不適切なメディアの扱いは人権問題にも繋がることなど、情報モラルについても触れる。

その思いを受け継いで（高学年3―1）

一 ねらい

生命が尊くかけがえのないものであることを感得し、自他の生命を尊重しようとする心を育てる。

二 資料の特質

・都市化や情報化による人間関係の希薄化は、人々の心の中に孤独感や孤立感を募らせ、自己を大切なものであると思える自尊感情の著しい低下を招く。そして、その結果、自己の存在意義や生きる意味を見失って、その尊い生命を失ってしまったと思われるような事件が後を絶たない。

・本資料は、生前はもとより、最期の時を迎えてもなお、孫への深い愛情とその思いを伝える祖父と、その思いを受け継いでそれを大切に生きていこうとする「ぼく」を中心に書かれている。自分の生命は自分だけのものではなく、家族をはじめ多くの大切な人々の深い愛情と思いによって支えられていることを伝え、自他のかけがえのない生命を大切に生きていこうとする心をはぐくみたい。

三 展開例

1 生命尊重にかかわる児童のアンケート調査結果を基に話し合う。

2 資料「その思いを受け継いで」を読んで、話し合う。

(1) じいちゃんの命が、あと三か月だと聞いたときのぼくの気持ちはどんなだったか。

・うそだ。そんなことは信じられない。悲しい。

(2) ぼくは、どんな思いで毎日病院に行ったのか。

・一緒にいる時間を大切に精一杯のことをしたい。

(3) じいちゃんがぼくの手を握り返したとき、ぼくはどんな思いだったか。

・じいちゃん、元気出してよ。このまま死んじゃ嫌だよ。

(4) 誕生祝いのはし袋に書かれた字を見て、ぼくはどんなことを思ったか。
・最期の最後までぼくを大切に思ってくれたんだ。ぼくが悲しまないよ
うにとこれからも見守ってくれるんだ。

・ぼくをかわいがってくれてありがとう。じいちゃんのぼくへの思いを大切に受け継いで頑張って生きていくよ。

3 自分自身を振り返り、命について感じたことや考えたことについて話し合う。

・命は自分だけのものではなく、家族や身近な人の深い愛情や思いによって支えられている。

・これからは自分の命をもっと大切にして生きたい。

4 心のノートの「いま生きているわたしを感じよう」（六十四～六十七頁）を活用し、自分の今までを振り返った上で、命についての考えをまとめる。

四 指導上の留意点及び工夫

・ねらいとする道徳的価値が家族愛に偏らないように、生命尊重にかかわる導入を行う。

・展開例2の(4)では「なぜ、じいちゃんのはし袋を用意していたのか」

など祖父の思いを考えさせることも方法である。

・道徳的価値の自覚が深まるように、教師が児童の話合いの要旨を生命尊重に照らして板書で整理し、焦点化を図るようにしていく。

・各教科、総合的な学習の時間、特別活動などにおける生命尊重にかかわる指導を振り返り、本時の学習で児童が自己の生き方についての考えを主体的に深められるようにする。

二ひきのカエル（高学年3―1）

一 ねらい

生命がかけがえのないものであることを知り、生きることのすばらしさを大切にしようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・生命の尊さに気付く、生命を大切にすることを育めることは、人間としてよりよい在り方生き方を求めていく上で基本的なことである。生命にかかわる様々な問題が表面化している今日において、改めて生命のかけがえのなさ、生命を輝かせ共に生きるすばらしさについて考えさせていくことが大切である。

・本資料は、井戸に落ちてしまったカエルのピョン太と前から井戸で暮らしているおじいさんガエルとの生き方に対する思いの対比を描いている。楽しい毎日を当り前のように過ごしてきたピョン太が突然それらの楽しみを失ってしまう。ピョン太の気持ちを通して、児童に生きることとはどのようなことなのかを考えさせたい。

三 展開例

1 「生きているってどんなことか」について考える。

2 資料「二ひきのカエル」を読んで、話し合う。

(1) 井戸に落ちてしまったピョン太は、おじいさんガエルの話を聞いてどんな気持ちだったか。

・もうここから出られないなんて悲しい。

・もう友達にも会えないのかなあ。

(2) 井戸のかべを登っているピョン太はどんな気持ちだったか。

・みんなのところにもどりたい。

・あきらめないで頑張って登ってみせるぞ。

(3) 井戸の中で何日もすごしているピョン太とおじいさんガエルはどんな気持ちでいたか。

・もう外にはでられない、ここで生きていくしかないのか。

・みんなは楽しく暮らしているだろうな。

(4) 井戸から出ることができたカエルはどんな気持ちだったか。

・せっかく外に出たので、頑張って生きていこう。

・今度は、外の世界で精一杯生きていこう。

3 自分たちの生活を振り返り、生きていてうれしい、楽しいと心から思ったことについて話し合う。

4 心のノートの「かけがえのない いのち」（七十六・七十七頁）に示されている「だからこそ みんな 精いっぱい生きる」を読んで、学習のまとめをする。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例2の(1)は、おじいさんガエルは井戸から出ることをもうあきらめていることに気付くようにする。

・展開例2の(3)では、外で楽しく生活していることに思いをはせるピョン太に共感させ、その気持ちを想像させるようにする。また、ピョン太とおじいさんガエルの生き方について対比しながら話し合わせることも考えられる。

・展開例3では、教師が、友達や多くの人とかかわって暮らしていることのすばらしさや、生きていくことのありがたさを感じた体験について話すことも方法である。

苦しいときだからこそ（高学年4―1）

一 ねらい

公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たしていこうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・我が国で実際にあった阪神・淡路大震災に取材した資料である。
・主人公の父親は阪神・淡路大震災で被災した。給水車を始め、代替バスの列など、大震災直後には並ぶ場面が数多くあった。無秩序な状況になりがちな場面ではあるが、このような状況下でも、被災者たちは列を崩さず、並んで待つことができた。「並ぶことはみんなが生きること」。極限状況にあっても並ぶことができた日本人の行動を父親はどのように語る。

・大震災直後という極限状態にあつて、公德心が必要となる場面で、われわれ日本人が、列を乱すことなく静かに並んだ事実を児童に伝え、苦しいときだからこそ公德を大切にすることを理解させることができる。また、その話を聞いた主人公の感じ方や考え方を児童に問うことで、日本人が守り抜いた公德に触れたときの多様な感じ方や考え方を引き出すことができる。

三 展開例

1 阪神・淡路大震災について知ること、被災の状況を理解し、極限状況にある人々に共感しやすくする。

2 資料「苦しいときだからこそ」を読んで、話し合う。

(1) 給水車が来たとき、父親はどのような気持ちだったか。

・抜かしてしまおうかな。

・早く水を飲みたい。

・誰よりも先に水を手に入れたい。

(2) バスに乗ろうとしている客がけんかしているのを見ているとき、父親はどのような気持ちだったか。

・こんな場所でけんかしないでいいのに。

・もつとつめればいいのに。

・つめたらみんながもつときなくなってしまう。

(3) 「並ぶことはみんなが生きること」という言葉を聞いて、わたしはどのようなことを考えたか。

・そんな状況でも並ぶことができた日本人はすごい。

・わたしもみんなのために並ばないといけないな。

3 今までの周りの人のことを考えずに行動してしまった経験を振り返って話し合う。

4 心のノートの「ぐるりとまわりを見渡せば」（八十―八十三頁）などを活用し、きまりやマナーの大切さについて考える。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例1において、阪神・淡路大震災の被害状況を十分に児童に伝えられるようにしたい。このようにすることで、展開において父親、また、その話を聞いたわたしに共感させやすくなり、幅広い感じ方や考え方を引き出すことができる。

・心のノート小学校3・4年の「やくそくやきまりを守るから仲よく生活できる」（七十二―七十三頁）には、このときの状況の写真が掲載されている。3・4年時の学習を生かして、児童に、公德の本質である「不特定多数の人々に対する」思いやりを自分とのかかわりで考えさせた。

お客様（高学年4―1）

一 ねらい

自他の権利を尊重し、進んで公德を大切にしようとする態度を養う。

二 資料の特質

・高学年の4―1(1)の指導では、権利・義務についての考えを深めていく必要がある。例えば費用を負担してサービスを受ける「お客様」であっても、自分の権利ばかりを主張しては、気持ちのよい社会は維持できないことについて考えさせる。人がたくさん集まる場所では、自他の権利を尊重し合い、互いに気持ちよく過ごせるための義務を果たさなければならぬ。そこに約束やきまりという確認事項がなくても、公德心をもとにしたマナーやモラルが求められる。

・声を張り上げてマナーを訴える係の人、楽しい場所でそれをうるさく思う主人公や周りの人たち。たくさんの人が、楽しむ権利や守るべき義務について考えを広げ深めることを通して、公德の大切さを考えさせ、規範意識を高めていきたい。

三 展開例

1 「権利」「義務」という言葉について知る。

2 資料「お客様」を読んで、話し合う。

(1) わたしが、係の人の注意を快く思わなかったのはどんな気持ちからか。

・せっかく楽しみに来ているのに注意ばかりでいやだ。

・自分達で気をつければいいのだから好きにさせて欲しい。

(2) わたしが「何か、変だ」と思ったのはどんな考えからか。

・肩車のせいでわたしは見えなくなったのに、それはいいのか。

・お金を払っていても、お客は係の人の指示に従う義務があるのではないか。

・いくらお金をもらっていても、みんなのことを考えて注意した係の人が謝っているのは変だ。

(3) わたしは、ショーが終わってからどんなことを考えたか。

・ショーを楽しみたかったのに文句を言う人がいたら台無しになった。始め、うるさいと思っていた係の人の注意は、みんなのことを考えてのものだったんだ。

・お客様でも自分の権利ばかりを主張して、他の人を不快にすることは許されてはいけない。周りもみんなお客様なのだから。

3 周りの人の権利を尊重するために、きまりやマナーを守ったことについて話し合う。

4 心のノートの「法やきまりを大切に」（八十三頁）を基に、「権利」と「義務」についてまとめる。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例の1では「権利」「義務」という言葉やその意味を板書に残しておき、児童が語る内容を構造的に整理しながら、その言葉にふれて話し合えるようにしておく。

・展開例3では、価値理解を深めるよう、小集団による話し合いを取り入れ、その後、学級全体で話し合わせる。

・展開例の3・4では、人々の権利義務がかかわり合う場面を広げてから考えさせる。（学校での授業、休み時間の校庭、図書室、交通機関、公園、映画館、ホテルや娯楽施設等）

きまりは何のために（高学年4―1）

一 ねらい

法やきまりを守り、自他の権利を大切にしようとする態度を育てる。

二 資料の特質

・ 校庭遊びのきまりを作った六年生が、自分勝手な都合できまりを破るようになった。発端は、ゲーム販売日に、明が高学年の時間を守らなかったことであった。そして、とうとう鉄男の蹴ったボールが一年生にあたり、校庭遊びは休止になってしまふ。だが、社会科見学で国会議事堂を訪れ、きまりについて改めて考えるようになる。

・ 身近な学校生活を題材としており、児童に自分自身のこととして考えさせることができる。主人公の気持ちに共感させながら、きまりの目的や意義について考えさせ、自他の権利を大切に、進んできまりを守ろうとする態度を養うことができる資料である。

三 展開例

1 学校での約束やきまりを思い起こして、話し合う。

2 資料「きまりは何のために」を読んで、話し合う。

(1) みんなが校庭遊びのきまりを守らなくなったのはどんな考えからか。

・ 自分が得になることを優先したから。

・ 自分勝手に他の人のことを考えていなかったから。

(2) 健一たちが改めてきまりについて考えたのはどんな思いからか。

・ 国のきまりが決定される仕組みを知って、学校のきまりの仕組みについて考えてみようと思った。

・ 自分たちも学校全体のことを考えて校庭遊びのきまりを提案したことを思い出した。

(3) みんなは、どんな思いで「きまりは何のためにあるのか」を話し合っ

たのか。

・ きまりの目的や意義を考えなくてはならない。

・ きまりを守ることが、自分の義務を果たすことだ。

・ きまりを守ることが、みんなの楽しく遊ぶ権利を保障する。

3 学校での約束やきまりについて、守れているもの、守れていないものを挙げ、守るための方法について話し合う。

4 教師の体験談を聞く。（きまりを守った話、守れなかった話、守ったときの気持ちなどについて話す。）

四 指導上の留意点及び工夫

・ 自分たちで決めたきまりを守らなければならないことは、だれもが分かっているが、ときとして、守れないことがある。社会科見学をきっかけに、主人公が校庭遊びのきまりについて改めて考える場面に着目させ、この学級の児童として話合いに参加していたらどんな発言をするかを考えさせたい。その際に、きまりを破った明や鉄男の気持ちも、役割演技などを通じて考えさせるとともに、後悔し反省していく様子にも着目させたい。

・ 社会科における政治の働き、特別活動における学級や学校の生活づくりなどと関連させながら、きまりの目的や意義とともに、自他の権利を尊重する大切さについて、多様な友達の考えを聞き、ワークシートなどに書く活動を通して自分の考えをまとめさせるようにする。

一 ねらい

自分の役割の意義を理解し、協力して主体的に責任を果たそうとする
心情を育てる。

二 資料の特質

- ・ 先人の姿から、ねらいとする道徳的価値を考える資料である。
- ・ 小川笙船は、徳川吉宗の享保の改革で、目安箱にて江戸の病人にまつわる惨状を訴えた。吉宗の命により大岡越前が指揮をふるい、小石川養生所が建てられ、笙船は養生所の運営を取り仕切った。生命の軽重なく医師としての姿を示し、他の人の力も生かして、江戸の町を何とかしていこうとする笙船の真摯な姿は心を打つものがある。
- ・ 役割のあるところには、その役割を必要とする人がいる。そこに気付いたときに、自分の果たすべき責任を自覚できる。定吉や若い医師へかわる笙船の姿から感じ取ったことを話し合い、ねらいとする道徳的価値についての感じ方、考え方を広げ深めさせたい。

三 展開例

- 1 心のノートの「わたしが参加している集団とその役割」(八十八頁)などを活用して、自分がどんな役割を担っているかを想起する。
- 2 資料「小川笙船」を読んで、話し合う。
 - (1) 定吉の涙がほおを伝わるのを見たとき、笙船はどんなことを思ったか。
 - ・ 助けてあげてよかった。困っている人は他にも大勢いる。
 - ・ 金が無く不安だったんだな。かわいそうに。安心させることができよかったです。
 - (2) 笙船はどんな思いで殿様に訴えたのか。
 - ・ このまま病人が増えると、江戸は大変なことになる。何とかしなければ。

・ 養生所ができれば、救える生命がある。

(3) 笙船は、どんな考えから目の回るような忙しさの中で、夜遅くまで治療を確かめたり、日誌に目を通したり、声を掛けたりしたのだろう。

・ セツかく作ってもらった養生所だからしっかり仕事をやりたかった。それが自分の責任だから。

・ 貧しい人の生命を助けたいから頑張る。

・ 自分一人ではできないので、若い医者に自分のように育ってもらいたい。そうすれば、更に生命を助けることができる。

3 これまでの学習の中で、笙船のように自分の役割を主体的に果たしたと思われる人物について発表し合う。

4 自分が担っている役割の意義を理解し、主体的に責任を果たそうとしていたか、振り返る。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 展開例の1では、ねらいとする道徳的価値への方向付けをする。本資料では、「生命尊重」「思いやり、親切」等の関連価値が浮かび上がってくるので、導入で方向付けを行うと効果的である。

・ 多くの人が必要とされる役割であったことに留まらず、さらに責任を果たすために施設の実現や人材の育成等に奮闘する姿について、思いや考えを広げ深めさせるようにする。

・ 展開例の4では、学校生活・地域地区班活動・地域スポーツチームなど、場面を広げて考えさせる。

立志の人―山川健次郎―（高学年4―(7)）

一 ねらい

先人の努力を知り、郷土や国を愛そうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・わたしたちは郷土の空気を吸い、水を飲み、成長してきた。また、ここで生まれた人々の導きによって、人として育てられたのである。その郷土に感謝する心から、郷土を愛する心が育つのである。このことが日本全体に開かれたものへと発展し、国を愛する心へとつながっていく。

・本資料は、山川健次郎の若き日々を描いている。郷土を愛する思いが、日本を愛する心へと高まっていく様子を描いている。そこから、我が国の発展のために尽くした先人の努力を知ることにより、自分もまた世のため人のために努めようとする心構えを育てることができると考える。

三 展開例

1 江戸末期の戊辰戦争について簡潔に説明し、資料への導入を図る。

2 資料「立志の人―山川健次郎―」を読んで、話し合う。

(1) 太平洋上で二隻の船が出合ったとき、健次郎はどんなことを考えたのだろうか。

・こんな広い海で出合えるなんて、すばらしい技術だ。

(2) 英語がわからず、日本人がいない中で、健次郎はどんな気持ちでいたのだろうか。

・毎日が苦痛で、早く日本に帰りたい。

・何とか努力して日本の役に立つようになりたい。

(3) 帰国命令が出たとき、健次郎は友達にどんな気持ちを語ったのだろうか。

・あきらめて帰国するしかないのか。

・何とかして勉強を続けていきたい。

(4) 帰国後、大学の先生になった健次郎は、どんな思いを抱きながら仕事をしていたのだろうか。

・日本を支える多くの人材を育成したい。

3 これまでの学習の中で取り扱った、郷土や国のために力を尽くした人物を簡単に紹介し合い、その感想を話し合う。

4 地域の優れた先人について、教師の話を聞く。

四 指導上の留意点及び工夫

・導入では、地理・歴史的な学習を取り入れておきたい。

・展開例の2では、発問を通して児童に、健次郎の思いや努力を想像させて語らせたい。

・展開例の3では、偉大な先人のことを簡単に紹介し合って、自分とのかかわりを深めるようにする。

・展開例の4では、教師自身が日頃から地域に関心をもって資料を収集し、ねらいにふさわしい説話にしたい。

《歴史的な背景》

江戸時代末期、幕府側の会津藩は、徳川家の存亡を背負い、薩摩藩・長州藩を主とする倒幕側と戦った。敗戦後、会津藩は郷土を追われ、悲惨な運命をたどった。しかし、薩長藩閥政府の中、山川健次郎は帝大総長を二度にわたって務めた。

【出典、写真提供】「明治を生きた会津人山川健次郎の生涯 白虎隊士から帝大総長へ」（ちくま文庫）著者 星亮一

人間をつくる道―剣道―（高学年4―（7））

一 ねらい

我が国の伝統と文化について知り、それらを大切にしていこうとする
心情を育てる。

二 資料の特質

- ・ 本資料は、日本の伝統的な武道である、剣道取材した資料である。
- ・ 主人公は剣道に興味をもち、稽古に通い始めるが、その細かい決まりごとに戸惑いを感じながらも、試合での勝利に向けて稽古を積み重ねている。試合の日、一回戦で敗れてしまった後、引き上げの際に師範に注意され、大人の試合を見学していく中で、日本人が大切にしていた心について実感していく。次の稽古で師範の話を通し、日本人が大切にしてきた「人間をつくる道」に気付いていく少年の話である。
- ・ 剣道という我が国古来の武道を通して、日本古来のものを、自分とのかかわりで考えさせることのできる資料である。

三 展開例

- 1 剣道の映像、画像を見て、日本古来の武道であることを知る。
- 2 資料「人間をつくる道―剣道―」を読んで、話し合う。
 - (1) 厳しい剣道の稽古に励んでいるとき、ぼくはどのような気持ちだったか。
 - ・ もう、やめたいな。どうして剣道が続けてきたのだろう。
 - ・ 頑張つて試合で勝てるようになりたい。
 - (2) 大人の試合を見ながら、ぼくはどのようなことを考えているか。
 - ・ 自分の試合とどこが違うのだろう。
 - ・ とてもかっこいいな。負けたほうがすがしい。
 - ・ 先生は、自分が負けてふてくされたことを注意したんだ。

- (3) 「人間をつくる道」という言葉を聞いて、ぼくはどのようなことを考えたか。

・ 剣道の稽古を通していろいろなことを学べるんだ。

・ 礼儀は日本人が大切にしてきたことなんだ。

・ 日本人が大切にしてきたことを自分も守り続けなければ。

- 3 これまで各教科等で学習してきた、日本に古くから伝わっていることを自分とのかかわりで想起し、発表し合う。

- 4 心のノートの「語りつぎ受けつぐ日本らしさ」（百六・百七頁）を活用し、伝統文化を自分の生活や将来に生かす方法などについて考える。

四 指導上の留意点及び工夫

- ・ 展開例の1において、剣道の激しさや美しさを映像や画像を用いて児童に示すようにする。このことで、剣道というものを理解することができ、剣道とのかかわりで自分を考えているぼくに共感させやすくなることができる。
- ・ 展開例の3では、我が国の伝統や文化を児童自身のかかわりを通して考えさせるために、「剣道」のような「武道」に限らず、日本に古くから伝わることを幅広く出させ、それとどのようにかかわっているかを振り返らせたい。我が国の伝統や文化との児童とのかかわりは、学校以外の活動も考えられるため、家庭からの情報を得ることなども考えられる。

小学校第5学年及び第6学年	中学校
(1) 生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛ける。	(1) 望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする。
(2) より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。	(2) より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。
(3) 自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。	(3) 自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。
(4) 誠実に、明るく楽しく生活する。	
(5) 真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。	(4) 真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。
(6) 自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。	(5) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。
(1) 時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。	(1) 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。
(2) だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする。	(2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。
(3) 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。	(3) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。 (4) 男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。
(4) 謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にする。	(5) それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心を持ち謙虚に他に学ぶ。
(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。	(6) 多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる。
(1) 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。	(1) 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。
(2) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。	(2) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。
(3) 美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。	(3) 人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さが有る事を信じて、人間として生きること喜びを見いだすように努める。
(1) 公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たす。	(1) 法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。 (2) 公德心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。
(2) だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。	(3) 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。
(3) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。	(4) 自分が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。
(4) 働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。	(5) 勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。
(5) 父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。	(6) 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。
(6) 先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。	(7) 学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。
(7) 郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。	(8) 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。 (9) 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。
(8) 外国の人々や文化を大切にすることをもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。	(10) 世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

○ 「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表

小学校第1学年及び第2学年	小学校第3学年及び第4学年
1 主として自分自身に関すること	
(1) 健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。	(1) 自分でできることは自分でやり、よく考えて行動し、節度のある生活をする。
(2) 自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。	(2) 自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。
(3) よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。	(3) 正しいと判断したことは、勇気をもって行う。
(4) うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。	(4) 過ちは素直に改め、正直に明るい心で元気に生活する。
	(5) 自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。
2 主として他の人とかかわりに関すること	
(1) 気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。	(1) 礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。
(2) 幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。	(2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。
(3) 友達と仲よくし、助け合う。	(3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
(4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する。	(4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。
3 主として自然や崇高なものとかかわりに関すること	
(1) 生きることを喜び、生命を大切にすることをもち。	(1) 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする。
(2) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。	(2) 自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする。
(3) 美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。	(3) 美しいものや気高いものに感動する心をもつ。
4 主として集団や社会とかかわりに関すること	
(1) 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にする。	(1) 約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。
(2) 働くことのよさを感じて、みんなのために働く。	(2) 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。
(3) 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	(3) 父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。
(4) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。	(4) 先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級をつくる。
(5) 郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。	(5) 郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ。
	(6) 我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。

作 成 協 力 者 (五十音順)

五十嵐 正 広	千葉県船橋市立船橋小学校教頭
岩 田 洋 子	鳥取県鳥取市立末恒小学校校長
上 杉 賢 士	千葉大学大学院教授
内 野 多美子	さいたま市教育委員会主任指導主事
遠 藤 修	東京都狛江市立狛江第一小学校主幹教諭
及 川 勝 也	北海道教育大学附属旭川小学校副校長
木 村 恵 子	東京都杉並区立高井戸第四小学校校長
木 村 隆 史	東京都豊島区立豊成小学校主任教諭
齋 藤 賢 二	東京都羽村市教育委員会指導主事
齋 藤 眞 弓	茨城県石岡市立府中小学校教諭
齋 藤 道 子	東京都文京区立誠之小学校主幹教諭
坂 口 幸 恵	東京都江戸川区立平井第二小学校校長
笹 川 智恵美	東京都葛飾区立松上小学校副校長
島 恒 生	畿央大学教授
筒 井 鉄 也	東京都墨田区立梅若小学校校長
徳 満 哲 夫	東京都渋谷区立臨川小学校校長
中 治 謙 一	東京都港区立麻布小学校教諭
橋 本 ひろみ	東京都世田谷区立池之上小学校主任教諭
長 谷 徹	東京家政学院大学教授
松 井 敏	東京都中野区立桃花小学校主幹教諭
毛 内 嘉 威	青森県総合学校教育センター指導主事
毛 利 直 巳	島根県松江市立大谷小学校校長
森 有 希	高知県教育委員会指導主事
吉 本 恒 幸	聖徳大学教授
和井内 良 樹	東京学芸大学附属小金井小学校教諭

(職名は平成23年1月現在)

なお、文部科学省においては、次の者が本書の編集に当たった。

平 林 正 吉	初等中等教育局教育課程課長
山 田 素 子	初等中等教育局教育課程課学校教育官
赤 堀 博 行	初等中等教育局教育課程課教科調査官

